

白金莎

7月号



平成 27 年 7 月 発行

第 53 号

白金葭定例句会案内

光成高志

羽搏きて還らぬ時を夏燕

八月六日(木) 10:00 ~ 17:00 岩行句会(西新井大師→炎天寺)
九月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題..芋嵐、衣被きぬかつぎ
十月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題..愁思、落鮎

月例句会報 (15/7/17 7名欠2) (鬼灯市、日)

盛) 飯田孝三

光みち

賑ははし越して十年雛燕
日盛や深閑として武家屋敷
四万六千日スカイツリーは雲の中
有難や礎石青苔五重塔(羽黒山)
夏雲雀月山八合目晴れて

篝鶴の舳へさきせかせか舷ゑなべりふはは

川花火もいくつ寝たら清の忌

スカイツリー四万六千日の簷

日盛りの喉のんどの仏鳴らし乾す

牛蛙線路はつづくどこまでも

増田陽一

吉羽多美子

杖持ちて捩よじれ歩くや日の盛り

鬼灯市人形焼を買ひにけり

夏帽は失ふものぞ遠きデモ

独りゐて青芝広く鴉かな

鬼灯の市下町に粋残り
緑陰に猫の先客ありにけり
緑陰に手話の少年少女かな
十葉のはびこる庭の花明り

口あけてあけて親待つ燕の子
日盛をジョン万次郎の曾孫来る
日盛や廄は暗く深閑と

重曹と鷹の爪買ふ半夏生

雨傘の中に札出す鬼灯市

多 美 孝 三 高 志 昭 七 孝 三 幸 一 高 志 啓 泰 昭 七 幸 一 多 美 孝 三 幸 一 正 美 昭 七 幸 一 多 美 孝 三 啓 泰 昭 七 高 志 幸 一 正 美 みち みち

一句鑑賞

光成高志入

孝
一

カイツリー 四万六千日の簷
この句何回も読んでいたら、これはスカイツリーの設計コンセプトを詠つた句なのだと気づきました。東京の下町と一体となるようにつくられた塔である。高い樹をイメージしている。その簷(き)をなす展望台から浅草寺の観音様に手を合わせて四万六千日分の功德を授かりますようにと願う場所でもあるのだ。五重塔に登れない庶民はスカイツリーの簷(き)からお参りできるのだ。ぐるり回れば富士山も筑波山も運がよければ拝める。東京の街は墓石群に見えるとか、東京砂漠という時代もあった。それらをひつくるめて、四万六千日といふ縁日の簷となれという願いもこめて。

鉢のままほおづき市より荷が届く
境内を狭めて賑わう鬼灯市
重曹と鷹の爪買ふ半夏生
噴水あび日盛りはじく子らの声
緑陰に手話の少年少女かな
日盛りの喉のんどの仏鳴らし乾す
肩ぶれあつてご利益願う鬼灯市
有難や礎石青苔五重塔(羽黒山)
しんがりのゴルフアー一人日の盛り
独りゐて青苔広く鳴かな

四万六千日の雲霞の一人かな

幸一

この句、スカイツリーの簷から見た四万六千日参り

ある。それは作者の自問であり、きつと自答して自足しているのだ。

の善男善女の光景のようだ。雲霞のような人々の一人として私もお参りしているのだという認識だ。この日

お参りすれば、四万六千日お参りした功德を授かると

言うのだから、誰でもお参りしたくなる。四万六千日を年数に直すと百二十六年にもなる。寿命を遥かに超えて子孫にまで及ぶ功德となるではないか。あるいは先の震災で亡くなられた方々の分までまかなつてあまりある。私も今年は雲霞の一人としてお参りしました。

日盛や厩は暗く深閑と

みち

陸奥の南部曲屋の厩を想像した。あるいは芭蕉の泊つた封人の家の厩を想像した。外は日盛り、誰一人通らぬ村の佇まい。深閑としている。皆昼夜でもしているのだ。日盛りと深閑とは同意の言葉で、使わずに深閑を表現できなかとの意見があつた。「暗く」はなくともいい言葉ではないかと思うが、「深閑と」は描写したかつた副詞であり、作者の心もちもこれで表わしかつただろう。

羽搏きて還らぬ時を夏燕

陽一

夏燕は卵を二回生み雛を二回育てて秋早々に南方ジヤワ島などへ帰つていく。忙しいのだ。羽搏きて羽搏きて餌を取つてきて雛に食わす。そんなに働いても還らぬ時をなぜに燕さんよ、と夏燕に呼びかけている句で

一句鑑賞

武者昭七

夏帽は失ふものぞ遠きデモ

陽一

日頃愛用していたものを失くしたときの悲しみは大きい。体の一部をもがれたような空虚感がある。咏者はかつて愛用の夏帽子を失つた経験が実際にあるのだという。「夏帽は失ふものぞ」という語調にはその衝撃と傷心を必死になだめようとする切ない心情がほとばしっている。「あきらめよ我がこころ」というわけである。思えばひとはその時々に、あるいは「夏帽」をみずから脱ぎ棄て、あるいは心ならずも失いして生きているのかもしれない。結句「遠きデモ」に青春の残像がある。

羽搏きて還らぬ時を夏燕

陽一

時間は巻き戻すことができない。一旦羽ばたいて過ぎ去つた時間はもう一度と返らない。この句のテーマはそういう「時間」である。一度と還らぬものへの哀惜とノスタルジー。とともに内省のまなざしが濃い句である。

日盛や厩は暗く森閑と

みち

句会では「森閑」という用字に議論があつた。思うに、「日盛」というのは夏の過酷な日差しと炎熱の中にあって人間の気配も自然の気配も一齊に消え去つた一

瞬の神秘な無音の世界をいうのだろう。それを咏者は森閑と表現した。暗く森閑とした廻は遠野物語の世界のように不気味である。

ほおづきが宅急便で朝届く

ほおづき市にちなんでの贈り物であろう。本来なら

朝早く鉢のまま手に提げて自分で届けに来るはずなのになんと送り主の姿は見えずやつてきたのは宅急便というわけだ。しかし朝届けたというところに送り手の心づかいが見えてうれしい。なんでも便利になり手軽になつた現代生活だけれどやさしい配慮はうれしいものだ。

十葉のはびこる庭の花明り

「十葉」はどくだみで夏の、「花明り」は桜が満開で闇の中でもほんのり明るいことで春の季語。季語のだぶりやちぐはぐさはご法度であるのは先刻ご存知なれど、この句で花明りを桜と読み違える人はあるまい。桜は花だけれど花は桜とは限らない。言葉の縛りは緩い方がいい。

一句鑑賞

川も月日も流れ我鬼忌来る

流れで止まぬ川の水に時の流れを見て嘆く詩は多い。『ミラボ一橋の下をセーヌが流れる・月日は流れ、私は残る』のアポリネールが嘆いたのは恋のなりゆき

啓泰

川花火もいくつ寝たら清の忌

忌の句が続くけれど、「清」が貼紙絵の作家山下清であることは代表作の主題「川花火」の語で判る、と作者に教わって、成程と了解した。「もいくつ寝たら」は正月など、親しい行事を待ち望むときの慣用語であつたから、掲句には山下清の作品、また飄々とした人柄への親愛が滲む。筆者も山下氏の情景の記憶力と、緻密な表現は素晴らしいと思う。

梅雨寒やセーターどこへやつたやら

昭七

今年の梅雨は長く時には本当に寒かつた。セーターが見つからないのは、きちんと仕舞つておいてくれる方が居るからである。僕などはいま一人暮らしで、冬からの衣類がまだ積み重なつていて、かき混ぜるとすぐ見つかる。掲句は、梅雨寒に遭つて慌ててあちこち探している様子の「どこへやつたやら」が良くて、老境とは限らないけれど、そう読めば何だか愛嬌が感じられる。

孝三

増田陽一 大幸一

夏雲雀月山八合目晴れて

出羽三山のひとつ、修驗道の名山で湿原や高山植物も多いそだからさぞ雲雀も上るのであろう。八合目高志

だつたけれど、掲句の『餓鬼忌』で俄然『自ら選んだ死』への嘆きとなる。ここには東京人の芥川に因んだ「隅田川」が、吾妻橋付近から下流への異称とされる「大川」を使うことで、やや抽象化されて韻き、広く死者への追悼の念さへ感じられる。

まで上るのは大変だろう。休憩して汗も冷えた時に夏雲雀を聞く心地よさが出て、「八合目晴れて」の語調が爽やか。

日盛をジョン万次郎の曾孫来る

みち

ジョン中浜万次郎は、若年で漁に出て難破し米国船に救われ十年の教育を受けて帰国、時の幕府が是非必要とした能力を買わされて要職につき名を残した人物と聞き、人の運命の不思議を思う。偶然の災厄がまた幸運であり、優れた資質を開花させたわけである。その曾孫というのが居て、ある日講演に来たそうである。伝説のような事件と現在の日常とをリアルに繋ぐのはこの「日盛」の季語の微妙な作用と思う。

縁陰に手話の少年少女かな

多美子

縁の木陰深いところで、少年と少女が話し合っている。手話だから動きは見えるけれど声は全く聞こえない。僕は一人とも白い服装のように見えてきて、縁陰の中のパントマイムが別世界から来たもののようにある。有名な三鬼の「縁陰に三人の老婆わらへりき」を「白昼の魔宴サバト」（塚本邦雄）というならば、こちらは天使の情景であるのかも知れない。

ほおずきが宅急便で朝届く

啓泰

便利な時代である。宅急便はどこへも、からも、一夜で運ぶ。有り難や鬼灯市参りも手軽で気軽。日頃、多端な啓泰さん、早速一鉢（？）選び、宅送を託す。贅は「朝」、朝ならではの生氣を届け、瑞々しい鬼灯が元気をくれるのだ。四角四面の荷を解くと、かな書き「ほおづき」のたたずまいが、艶になつかしい。他に「広島忌卵食うなら一口で」、三鬼句を一呑みする、豪氣と哀感が見もの。

一句鑑賞

飯田孝三

雨傘の中に札出す鬼灯市

みち

鬼灯市は、梅雨時とてもよく雨が降る。それが鬼灯を

賑ははし越して十年雛燕

高志

新居に引っ越して十年、都内ではめつつきり減った燕だが、今年も、軒端の雛が賑わう。やがて巣立ち、秋

にはうち揃つて南へ帰る。わが家も子供たちが元氣に育ち、巣立ち、それぞれの家庭をもつ。子育てに忙しかつた一齣々々が、昨日のよう目に浮ぶのである。候鳥わたりどりならぬ人は、熟年一人孤星を守るが、時に係累うち揃う、また賑ははしからずや。「賑ははし」は富み栄える、寿ぎの謂い。さあ、記紀万葉源氏を溯る、大和ことばの豊饒のたゆたいに包まれよう。諳じて情懷ふかく、なかんづく「ん」の実感。ところで、贋は「雛燕」。口々に囁す雛燕に、眼前、昔幼子の顔々が重なる。

四万六千日の雲霞の一人かな

幸一

軍国少年世代には、「雲霞」の如しは、打ち寄せる敵の軍勢の謂い。一網打尽撃ち伏せる、浅き夢見し大和魂だま。時は変わつて、平成樂士、え、穢土?とまれ善男善女蝶集して、廬舎那仏ぼとけに跪く、数ならぬ身とな思ひそ、御恵み四匂に普あまねし、この一日、四万六千日祈願の御功德を賜る。比喩は、やつぱり隱喻がいい、直裁簡明、潔し。「かな」に万感、動かない。

鬼灯市人形焼を賣ひにけり

境内、折りしも鬼灯市で賑わう。まづは觀音様を拝み、名物人形焼を仲見世の老舗に買う、鬼灯の生氣と人形焼の素朴さにふと心癒される。一口、四万六千日のご功德に浴せるかな。鉢植えの鬼灯は、今や町では育て難い、人形焼なら、悦子さんと一緒に召し上がる。イ音をたたむリズムが屈託なく、人形焼「も」ならぬ「を」

がさわり。さつぱり「けり」の俳諧味がいい。外に「夏帽は失ふものぞ遠きデモ」、帽子はなくし易い、まして夏帽。「遠きデモ」は安保の昔か、溯る皇居前、血のメーデーか。ともに遠い夏、また夏隣る日の出来事。はて「夏帽」は。

俳窓評論纂

*海光

児等よ、今昼は真盛、日もこゝもとに照らしぬ。

寂寥大海の札拂して、
天津日に捧ぐる香は、
淨まはる潮のにほひ、

轟く波凝、動がぬ岩根、靡く藻よ、

黒金の船の舳先よ、

岬代赭色に、獅子の踏留れる如く、
足を延たるこゝ、入海のひたおもて
うちさす都のまちは、

煩悶の壁に悩めど、

鏡なす白川は蜘蛛手に流れ、
風のみひとり、たまさぐる、

洞穴口の花の錦や。〈ダンヌンチオ—『贊歌』〉

上田敏「海潮音」より（M38年）
先々月ひろし先生に教えてもらつた代赭色の用例が右の詩に出てきました。これで更によくわかりました。

*先月の受贈誌に取り上げた彩123号の句「遅日なほ姉・

三・六角・蛸・錦」のひろし先生の句、京都の人には馴染みの京の通り名わらべ唄にある「あねさんろっかくたこにしき」を詠われたものです。姉小路通・三条通・六角通・蛸薬師通 錦小路通の頭文字を・で仕切つて並べたユニークな俳句。彼岸の入り頃の京都は遅日と言つたつてまだ寒いなあという感慨を通りの名を並べて陳べたものでしよう。京都が好きでまた新し物がりやでないと書けない句と思います。

*以下は日本語の良さと日本人の良さの根源を見た思いをしたので書く。十三日のスタヂオパークに出た歌手のクリスハートのことである。桑港から来ている半黒人歌手だ。日本に帰化して一生住みたいという。いろんな方言がありどこでもいい景色があり、食べ物もいろいろなものがある素晴らしい日本に。高畠淳子さんが「ありがとうございます」と涙して御札を言つていた。私思うに、日本人の魂がアフリカから大移動した元の人間の魂と合体したのがクリスハートではないか。そういう可能性がまだ日本人には残つていると。

*本誌は俳誌交換を四誌と行つています。「彩」「飛行雲」「あすか」それに「東京クラブ」です。(時々啓泰主宰の「亜」を貰います)夫々、平野ひろし主宰、駿河岳水主宰、山尾かづひろさん、長屋璃子さんから送られてきます。ざあつと速読して、瞬間選句をさせてもらい、二

回三回と読んで受贈誌の欄に掲載しております。スペースが少なくて恐縮しております。前の二誌には受贈誌欄があり、主に主宰の句が紹介されていて、そこに懐かしい名前の方々があるので、必読しております。岳水さんの受贈句誌の数には驚きます。百一十六句を掲載されておられ、季刊とは言え、目を通すだけでも大変な速読だと思われます。敬意を表します。癌などなんのそ克服されて旅吟も再会されたようです。

ハガキ句（52報）管見

穴覗く君に目が合ふ嫁が君

高志

「嫁が君」は正月三が日の鼠のこと。その謂れは知らないが、古く、そう呼んだ各地の習俗に由来するようだ。日頃、忌み嫌われるにしては、名の響きが愛らしい。むべ、その挙動はどこか憎めず、可愛いげがある。古く、鼠は大黒さまの使いとか、各地の昔話にも、思わぬ財宝を授かる“鼠のお札”が伝わる。「鼠淨土」である。一方、俳諧・俳句の世界では、間々、ほのぼのと色香がただよう夢想境に運んでくれる。

明くる夜もほのかに嬉しよめが君

其角

どこからか日のさす闇や嫁が君

鬼城

ぬば玉の闇いまみぬ嫁が君

不器男

野口里井

嫁が君全き姿見らりけり

ところで、掲句、穴の向こうにあつたのは、宝の山で

も馥郁の帳でもない。夢にまで見た君のつぶらな眼と
出喰わしたのだ。めでたし。巧まず俳諧がこぼれ、新鮮
無垢な感興は常套の官能の境をぬけ、上質である。

綾取りの富士見せに来る四日かな

敏子

綾取りは、昔から伝わる主に女兒が一人でする遊戯。
富士山の形どりはさして難しくないので、五六歳の子
か、相手の手から移した糸で織れた富士山を喜々と見
せにくる。むかえるぢぢ、ばばが愛想をくずす。正月、
一家里帰りでの情景だろう。「富士」がめでたい。子供
の表情が晴れやか、淑氣ゆるむ和やかな団欒は蓋し四
日である。「かな」に実感。

初空やひとは願ひぬ太古より

清美流

人は太古より祈り励みそして何を得何を失つたのだ
ろう。

(駄句近作)

予報士の早口三寒四温かな
鬼やらふ鬼のパンツの同じ柄

(平22・02・05)

お便り広場 (到着順、敬称略)

白金葭六月号拝受致しました。それにも素晴しい充実振りですね。『万葉の櫻か襟の色』昭和二十年は私が旧制中学一年生でした。四月から八月迄毎日この歌を行進しながら歌っていました。上級生は勤労動員でいませんでした。会社へ入つて二年目?位五月一日のメーデーの時、この曲が聞こえてきました。ビツ

クリしました。「たて万國の労働者」がこの曲でした。歌詞だけが異なつていたのですね。またお世話になります。

(6 / 30 小山陽也)

白金葭六月号をお送り頂き恐縮でございます。いつも事ながら御活躍の幅の広いこと尊敬申上げます。旧盆は八月十五日六日のことは承知いたしております。我家の子たちは盆休みを「自分達のレジャー」に優先し墓参りはその枠外と相なるわけで、親としてのジックンができるなかつた不明を恥じ入りますわけでござります。吟行参加できますればよろしく御願い申上げます。

(7/3 菊田寛子)

拝啓 夏空に雲の峰がひとつ高く立つところとなりました。変わらずご健勝のこととお喜び申しあげます。本年五月十八日、美清流は八二年の人生を終え、瞑目しました。略儀な手紙によるもので大変失礼かとは存じますが、お知らせ申しあげます。(中略)故人は、松本より東京へ出てきての学生時代、その後の日本原子力研究所勤務時代、そして弁護士となり横浜にて開業した以降も、皆さま方の厚いご交誼に支えられてここまでまいりましたこと、深く感謝申しあげます。なお、故人の遺志により、葬儀などは近しい親戚のみで執り行わせて頂き、昨日、四十九日も滞りなく終えました。香典等も皆さまにお気遣いなさらぬようとのこと

でしたので、どうぞお心遣いはなさらず、ただ故人への思いを祈り伝えていただければ幸いです。ここに美清流への生前のご厚誼を改めて拝謝し、衷心より御礼申し上げます。敬具

平成二七年七月六日 久保内良江

顕 統

(美清流さんは孝三さんの紹介にて、平成八年より八丁堀句会からずっとハガキ句を通じて俳縁を結んでいました。とくに平成20年の箱根一泊吟行会は最近のこととして記憶に新しく、本年5月1日の築地吟行会への案内をしようかな、すまいかなどいつも脳裏をかきめていました。ほんとにいい人であられました。心に残る人は美清流さんであります。句会報などで見られる綺麗な教科書体の文字にて今回もご丁寧な手紙を頂きました。孝三さんと相談の上、追悼句などを考えたいと思つています。高志)

東京のおぼんで14日坊さんが来宅、13日、15日は迎え火と送り火と、会費を送るのを忘れました。(17日は浦和の裁判所へ行きます)会費同封しました。古代は別便です。七月～九月はひまになりますが・・皆様の益々の御活躍を祈ります。
(7・14日 小山陽也)

送信投句お手数さまです。暑中お見舞い申上げます。

(7・15日 青木啓泰)

日中の暑熱が続き夕日が落ちる頃、やつと暑さがやわらぐ毎日でございますが、お障りなく、ご活躍の御事と

存じあげます。白金葭お表紙を飾る毎号の変化が樂しみで、暑さの中、どんな様子かと想像しております。土日に東京クラブの句会が終りましたが、お盆の墓参など私ごとで会報発行が遅くなりましたが、ご笑覧下されば嬉しゆうございます。この年になつて聞いたこともなく、見たこともない日本語の奥深さにただゝ瞠目することもあり何か調べたいと思うと辞書やら参考になりそうな本やらで、身の廻りが散らかり本を読み、こだんまりの生活など出来そうなく、時間ばかり過ぎます。句会の前に読んで兼題にとりくみ、佳い句など出来ず困ったものでござります。夏も出かけたくも、生きものが居れば、同じく老令、最後まで大事にしてやりたいので旅はアキラメです。梅雨も明け近く、暑さもきびしくなると存じますが、御身おいとい下さいますようごきげんよう。

(光成高志様 七月十五日 長屋璃子)

(ご丁寧なお手紙と東京クラブ句会報毎月ありがとうございます。これで俳誌交換が軌道に乗りました。最後の璃子様のご様子私も同様な生活ぶりです。同じように忙しく編集されている「彩」の不二南麓さんもおられます。どうかお元気でこのまま続けられますよう祈念申上げます。高志)

先の例会ではお世話になりました。いつもながら新鮮な野菜を有り難うございます。妻に渡すささげいんげん縁照り

特集の校正は大幅な訂正加筆で、たいへん二面倒をおかけします。恐縮ですがよろしく御願いいたします。梅雨明け、ますます烈日、ご夫妻とも御身ご大切にご健吟ください。

(平27・06・23 飯田孝三)

受贈誌 (H27年7月号)

明易し小綏鶏の <small>ニ</small> ゑ雉の <small>ニ</small> ゑ(彩123号)	平野ひろし
白南風を招ず大きく北開けて (リ)	リ
離宮内農道があり春田あり (リ)	リ
離宮の田すずなは <small>べら</small> 仏の座 (リ)	相田悠紀子
青き踏む無事故の免許返上し (75号)	駿河岳水
爪立ちて覗く園児の花御堂 <small>あすか</small> 7月号)	山尾かづひろ
蓮咲いて寺に陽気な花嫁御 (東京クラブ7月)	武子
猫の墓覆ひて余る茂りかな (リ)	璃子
水音に傾ぐ岸辺の額の花 (リ)	文男
胡瓜切るラヂオのギター音にのり (リ)	輝子
老鸞や風渡りゆく千枚田 (リ)	リ

恋の歌を読む

三

武者昭七

小竹さきの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹いも思ふ別れ来ぬれば
人麻呂が任地の石見の国に妻を置いて都に上るときの歌として万葉集卷二に見える歌です。笹の葉は山全体がざわざわと鳴るほどにざわめいているけれどこの俺

はひたすら家に置いてきたあいつのことと思いしのんではいるというのです。「さや」は目や耳にはつきりしているさま。「さやぐ」はざわざわとたちさわぐさま。深い山路を行く人麻呂の耳にきこえるものは風に鳴るささの葉の音だけです。三つ重ねられたサの音が効果をあげています。人麻呂は風に鳴る笹の葉擦れの音になきを聞き取っているのでしょうか。それは身近にカミに寄りつく気配です。古代のひとびとはいつも身辺にカミを意識して生きていました。いたるところにカミを感じとっていました。山にも野にも川にも森にも野原にもカミは宿っていたのです。カミといつても幸いをもたらすだけではありません。カミは時に悪霊となつてひとにひどく当たりちらしました。峠にはサエノカミがいて旅を行く人に捧げものを要求しました。旅に死んだ人は死靈となつて旅人にとりつき衣類や食べ物を要求しました。旅に行くことはそういう不安や恐怖に耐えることでした。

人麻呂にそういう力を与えてくれたものは残してきました妻への熱い思いです。置いてきた妻へのおもいの強さが旅の不安から彼を解き放ってくれたのです。「われは妹思ふ・」という妻恋いの詞は実は妻のもとへの無事な帰還への祈りを込めた詞でもあったのです。妻の力が旅の不安を鎮め自分を守ってくれることを古代の旅人は信じていたのです。

柿本人麻呂

(注) 「さやぐ」という詞は不穏や不安な状態を意味するのにつかわれた。

・・・瑞穂の国はいたくさやぎてありなり。
・・・畝傍山木の葉さやぎぬ風吹かんとす

古事記
〃

芭蕉の軽み以後(38)

梢よりあだに落ちけり蟬の殻 (蟬) 桃青

謡曲「桜川」の「梢よりあだに散りぬる花なれば、落ちても水のはれとは」のもじり句である。傍点の言葉をそのまま用いているが、落ちるものが花でなく蟬の殻としたおかしみがある。梢から高く飛ぶと思ひきや、虚しく地上に落ちたのは、蟬そのものではなく蟬の殻であつた。「水のはれ」に「淡あは」をきかせて蟬の「殻」に通わせた。括弧内は桃青がつけた前書。

行雲や犬の駆け尿村時雨 (時雨)

桃青

時おりさあっと時雨を降らせながら、足早に空を通り過ぎて行く雲のふるまいは、まさに犬の駆け尿といつた感じである。降つては止み、止んでは降る時雨を犬の駆け尿に見立てて卑俗化した。「犬の駆け尿」は犬が走りながら所々で少しづつ尿を出してゆく習性を云う言葉。少し俗化が強すぎる感じがするが、現代的感想は述べない方がよい。

一時雨礫や降つて小石川

桃青

光成高志

桃青

小石川から石礫を連想して、時雨の雨粒を礫に見立てた哲学でいう名辞的発想から、ほんとは雨粒なのだが、礫とも表現できるとしたのである。ひとしきり降つて通りすぎる時雨を一時雨と表現し、名辞的発想から、礫が降つて「小石の流れる川」になった。現に小石川村に川があるではないかという重層の寓言が談林風といふのであろう。

霜を着て風を敷き寝の捨子哉 (霜)

桃青

「きりぎりす鳴くや霜夜の狹筵さむしろに衣かたしき独りかも寝ん」(新古今集・秋・良経)を踏まえて哀れな捨子を虚構した句。「霜を着て」は「霜夜の狹筵」の転化であり、「風を敷き寝」は「衣かたしき」のもじりである。源氏物語の真木柱の巻に、髭黒の方の歌に、「心さへ空に乱れし雪もよにひとり冴えつる片敷の袖」があり、男女が互いに袖を敷き交して共寝するのに、心まであれこれ迷つて千々に乱れた雪の降る中に、独り寝の冷たい片敷の袖でした、という歌から片敷き寝どころか、風を敷いて寝るという風にかこつけた。

片敷を風を敷き寝に譬えた。ここが談林風というのである。寒夜の捨子に同情を寄せたというよりも、古歌を借りて大袈裟に表現したところ、悲惨な題材を取り入れ、生活の厳しさが沈潜しているところが新しいのである。後の「野ざらし紀行」の富士の捨子の前兆をなす句とも見られる。

この年の延宝五年は桃青三十四歳、関口水道工事に關係して多忙の中にも、江戸の俳壇にひしめく職業俳諧師の間に伍して着々と地位を固めていたのであつた。

芭蕉の軽み以後（39）

光成高志

富士の雪盧生^がが夢を築^つかせたり（雪）

桃青

謡曲「邯鄲」に盧生が夢に見た楚の王宮のさまを述べて、「東に三十丈に銀^{しお}がねの山を築かせては、黄金^この日輪を出だされたり」という詞をきかせて雪の富士の美を言い立てたもじり句。「銀の山」の語を抜き「盧生が夢」で気づかせようとする「抜け」の手法を用いている。「盧生が夢」は、蜀の青年、盧生が、邯鄲の宿で一睡の間に楚の王位に昇り、栄耀栄華の五十

のである。

白炭やかの浦島が老の箱（炭）

桃青

そもそも白炭^{しろまみ}なるもの、あの浦島太郎が玉手箱を開けて忽ち白髪頭になつたようなものだという句である。白炭は、炭焼きの仕上げ段階で窯^{かま}のなかに空氣を入れ、ほぼ焼きあがっている炭を約一三〇〇度の高温で燃やし、頃合を見て、真つ赤になつた炭を窯口から取り出し、灰と土を混ぜ、水分を含ませた消粉をかぶせてすばやく冷やしながら消すと表面に白い灰がつく

のでその名があるのだが、炭質がかたいので、一般には「カタズミ」ともよばれでいる。白炭の代表的なものは、ウバメガシからつくられる備長炭である。

浅草 桐蔭の俳号で新井白石の次の句が延宝八年刊行の江戸弁慶に所収されている。

白炭や燐^{きつねび}消て馬の骨（炭竈）

桐蔭

また、延宝四年秋に、神野忠知が「霜月やあるはなき身の影法師」と辞世して自刃した。年五十二。

白炭や焼かぬ昔の雪の枝

忠知

という句が有名になつて、白炭の忠知といわれた武士であつた。一人の句と並べてみると、桃青の頭脳の柔軟さがやや優つてていると思う。白石の句は、炭を作る竈の中に燐光が消えて累々と馬の骨のような墨が横たわつてゐる様を吾身に喻えて謙遜した意か。忠知の句は、白炭を見ていると、焼く前の昔の木の枝に白雪の積もつてゐる原木を想像させるという白炭の今昔を詠つて、吾身になぞらえたのである。桃青の句の玉手箱は白炭の縁語として茶会の炭箱の箱を掛けている。

これまでの桃青の句は、主に内藤風虎主催の『六百番俳諧発句合』に発表されたものである。句合は昔からある歌合に真似て発句で優劣を競うもので、芸術としてよりも、軽い遊戯的なものであつた。内藤風虎は奥州岩城平の城主であり、俳諧好きであったため、本拠の岩城に百人ちかい俳士があり、江戸藩邸にも俳諧師が集ま

り、さながら「風虎サロン」の様相を呈していた。二年前の宗因の下江は実は風虎の招きに応じたものであつた。江戸俳壇の発展はここから始まる。

芭蕉の軽み以後（40）

光成高志

されば爰に談林の木あり梅の花
眠をさますうぐいひす

梅翁 雪柴
在色

朝霞たばこの烟よこおれて

延宝年間（一六七三～八二）は、談林俳諧が最盛期を迎えていた。当時の江戸俳壇は、神田蝶々子・岸本調和ちよわら古風の一派を中心として、西山宗因の梅翁流を奉ずる、すくなくとも三派があつた。一つは、内藤風虎の江戸藩邸に集まるいわゆる「風虎サロン」のメンバ一、一つは、今治藩江戸留守居役江島山水（俳号）らの「夕方」を名乗る一派、いまひとつが田代松意しようい・由比雪柴せつさい・野口在色ざいしきらの「談林」派であつた。在色は、神野忠知について俳諧を学び、江戸俳壇の固陋さに批判的であつたので、世務を引退して点業への夢を持つていた松意らと語らい、寛文十三年（一六七三）春、神田鍛冶町の松意草庵を本拠地として俳諧談林派を成した。談林とは同名の僧徒の学場になぞらえた命名である。延宝三年（一六七五）夏、風虎の招きによつて宗因が下江し、風虎邸にあることを知つた談林派の人々は、前年大阪を訪れ既に宗因に師礼をとつていた十百韻を興行した。すなわち『談林十百韻』がこれである。

芭蕉の木というものは檀林の梅檀木になぞらえ、梅の木をいう。梅の花は京から大宰府まで飛んだという天神の飛梅伝説から、「飛躰とびてい」と呼ばれる談林風の木に擬した。さてここに梅の花が馥郁と咲き匂つてゐる。いうならばこの木は談林の園に生い出た木と称すべきであろうという、談林から飛躰、飛梅、梅の木という連想である。千句構成上の約束に従い、春季の句をもつて挨拶した発句である。

脇句は、謡曲の詞を下敷きにして、鶯の声に世間の人々が眠りを覚ますといい、裏に、宗因の挨拶に応えて、その新風が世間俗俳の迷妄を破る意を寓したのである。第二は、鶯に目覚めてまず一服すれば、煙草の煙が横にたなびいて朝霞かと見紛うばかりである。煙草の煙を誇大化して転じたのである。

風虎サロンに集まつた若い俳人たちは全て貞門系で高野幽山、小西似春が中心人物であつた。季吟門の山口信章・松尾桃青・池西言水らがその周辺にあつた。古風な一派、夕方の一派、談林の一派とこの風虎サロンの三派の四つのグループがあつて、江戸俳壇は談林旋風のふきまくる巷と化していた。

我孫子日記

6/19	白金霞
例会	第 53 号
6/20	光成高志
鎌倉	(直 & Fax 04-7187-1068)
6/24	発行年月 27年7月発行
SOA	編集・発行人
7/1	表紙の題字
SOA	加納綾女
7/5	7月22日の白金霞
*	我孫子市南新木2-14-17
藏王温泉	1119
7/6	270
*2 酒田→羽黒山	14
7/7 月山	17
*3 鬼灯市	1068
7/9	
*4 7/17 例会	

* 夏夕焼藏王の町を明るうす
紅花売る藏王参道梅雨晴間

*2 緑陰の中に黒塗り倉庫並ぶ
梅を干す本間家通り川近く

老鶯の一際高く羽黒山

蜩が長鳴きしをり皇子の為

涼しさの芭蕉句碑あり濃あぢさゐ

蜂子社の前に膝つく草刈夫

鳥居出で斎田今は青田中

*3 池塘遠近ニッコウキスゲ黄の点々

老鶯の語尾のちよん切れ八号目

月山に池塘のありて蛙鳴く

*4 鬼灯市小さい小さい森田子

鬼灯市一鉢二千五百円

雨の中鉢に水掛く鬼灯市

お手玉の如き鬼灯籠に売る

編集後記・自分の尻を叩く積りで、軽み以後を三篇入れて所定の
頁に收めました。五周年記念号の準備を始めました。

白金霞	第 53 号	平成 27 年 7 月 発行
編集・発行人	光成高志	(直 & Fax 04-7187-1068)
発行所	270	1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字	加納綾女	7月22日の白金霞
..	..	1068